

\*下記の日本語文書は参考のための仮翻訳で、正文は英文です。

## JIIAフォーラムにおけるジョン・V・ルース駐日米国大使の講演

「日米関係の多面性」

2009年12月4日

野上義二・日本国際問題研究所(JIIA)理事長兼所長によるルース大使の紹介

野上理事長、温かい歓迎の言葉をありがとうございます。また、今日このフォーラムを主催していただいたJIIAにもお礼を申し上げます。そして、本日お集まりの皆さんには、お時間を割いていただいたことに大変感謝しております。野上理事長がおっしゃったように、私は8月20日から、この素晴らしい国・日本で、戦後第15代目の米国大使を務めるという栄誉と光栄に浴しています。私はオバマ大統領から、歴代駐日米国大使を務めてきた真に偉大な政治家たちの後を引き継いで、この機会と責任を引き受けるよう要請されました。そのことについて、本当に身の引き締まる思いをしております。

ここにいらっしゃる多くの皆さんがご存知のように、私は（これまでの大使とは）少し異なる経歴を持っています。25年間、シリコンバレーで法律とビジネスに携わり、科学技術の分野では米国最大の法律事務所を経営するとともに、現代有数の優れた企業とビジネスをしてきました。私は、全く新しい視点を備えると同時に、この新しい世紀に米国の新しい大統領が取り組もうとしている目標と課題をよく理解しています。

私は日本に着任した時、最初の数カ月間は、政府・企業・非政府機関、その他日本のさまざまな分野の人たちから話を聞き、学ぶ期間にしようと決めていました。実際、私は、ここにいらっしゃる皆さんのうち、多くの方々にお目にかかったことがあります。私が日本に到着してからわずか2週間後に、日本では歴史的な政治の変化があったため、私はおそらく、今後何十年間にもわたって日米関係に影響を及ぼすことになる新世代の日本の指導者層について理解を深めることのできる特異な立場にあるのだろう、ということを感じました。また、この素晴らしい国と国民についての理解を深めるために、努めて日本の各地を訪れました。私も家族も、東京とその周辺を存分に楽しむだけでなく、大阪、京都、広島、名古屋、福岡、沖縄を訪れました。今月下旬には北海道へ行くことになっており、これも楽しみにしています。さらに、日米同盟に対する理解を深めるために、横田、三沢、岩国、横須賀、座間、普天間、キャンプ・シュワブ、嘉手納、厚木といった多くの米軍基地を訪問しました。このように、最初の数カ月は、多忙ながらも極めて実り多い期間となりました。

本日は、着任間もない私の考え、特に21世紀に日米関係を広く深く発展させる機会について私が考えることをお話ししたいと思います。

言うまでもないことですが、わずか65年前に戦争で激しく戦った2カ国が、このように緊密な同盟国、友好国、そしてパートナーとなっているのは驚くべきことです。共有する価値観のおかげで、私たちは、20世紀の後半から21世紀の初期にかけて、両国の国民に安定と繁栄をもたらすために協力することができました。そうする中で、日米両国の社会と国民は、数え切れないほど多くの側面でも相互につながりを持つようになりました。

もちろん、日米関係の基盤は安全保障関係にあります。世界の中でも独特な日米同盟関係は、過去半世紀において日本の防衛を確保するとともに、激変した地域の平和と安定に貢献しました。ま

た、日米同盟の安定性は、日本とその周辺諸国が経済的な成功とより良い生活を実現するための基盤を提供してきました。

先ごろオバマ大統領が東京のサントリー・ホールで行った、今回のアジア歴訪を定義する重要な演説で述べたように、日米の同盟が持続してきたのは、「それが両国の共通の価値観を反映したものであったからです。その価値観とは、自由な人々が自分たちの指導者を選び、自分たちの夢を実現する民主的権利への信念です」。そうした信念があったからこそ、鳩山首相とオバマ大統領はいずれも、変革を約束することによって選挙で勝利を収めることができたのです。日米両国は、今から50年前の共同宣言で、「対等と相互の理解」に基づく「不滅のパートナーシップ」を築くと述べています。そして、この同盟関係はこれまでうまく機能してきました。米軍と日本の自衛隊の協力関係と情報交換が、現在ほど良好であったことはかつてなく、基本的に、これは重要ですが、この同盟関係は、この地域における平和と安全保障の基盤であり続けています。

しかし、日米関係は、軍事的同盟よりさらに深い関係でもあります。

近代の日米関係が始まった当初から、日米両国民は、お互いの文化にある種の魅力を感じてきました。おそらくそれは、両国が地理的に大きく離れているからかもしれません。私と家族はまだ日本に来たばかりですが、この短い間にそうした魅力のとりこになってしまいました。私たちは、日本各地で歴史ある神社を訪れ、京都の店で独特の芸術品や民芸品を見たり、東京では茶の湯の簡素な美に触れることを楽しんでいます。日本語の勉強に苦勞することさえも楽しい経験です。しかし同時に、銀座を歩けば、日本人が老いも若きも iPhone などの米国製品を持ち歩き、米国の影響を受けているのを目にしないわけにはいきません。また、東京で私たちの住んでいる地域にある六本木ヒルズや東京ミッドタウンの素晴らしい開発プロジェクトには、日本の企業と協力した米国の建築・設計の影響を見ることができます。

私は、日米間の教育交流が、両国の深い関係の構築に大きく貢献してきたことに感銘を受けています。フルブライト・ジャパンが日本に招聘（しょうへい）した米国人教師や研究者は2400人を超え、6200人近い日本人の学生や研究者を米国に送り出しています。このほかにも、外国語青年招致事業（JETプログラム）をはじめ多くの交流制度があり、両国の理解を深めるために重要な役割を果たしてきました。鳩山首相が私の母校スタンフォード大学で博士号を取得されたことが、日米関係に持つ意義は小さくありません。数週間前に私と妻は自宅で「ビッグゲーム」パーティーを開きました。ご存じない方のために付け加えますと、「ビッグゲーム」とはカリフォルニア大学バークレー校とスタンフォード大学というライバル同士が毎年対決するフットボールの試合です。そのパーティーで私は、両校の日本人卒業生に会いましたが、彼らは日米両国でさまざまな分野に進んでおり、こうした卒業生が両国に良い影響を及ぼしていることは明らかでした。

私たちは、名古屋大学で米国留学経験のある学生たちと会い、彼らの教養と知識の水準の高さに深い感銘を受けました。また、私たちが日本で出会った米国人留学生にも、同様に感銘を受けています。

経済と科学の分野での日米関係も、両国のきずなを根本的に強化することに貢献してきました。

経済面では、数字だけを挙げて正当な評価を下すことはできませんが、その数字は素晴らしいものです。日本は、米国にとって北米以外では2番目に大きい貿易相手国であり、日米間で双方向に取引される物品・サービスの金額は1日に5億5000万ドルを超えています。日米の国民と企業が、それぞれお互いの質の高いブランド製品を求めていることが、両国の経済的パートナーシップの深さを表わしています。それは、長年にわたってそれぞれ相手国に投資してきた日米の企業の成功に表れています。ほんの数例を挙げれば、ホンダ、トヨタ、キャノン、ソニーといったブランドは、

長い間米国市場で企業活動を続け、とても高い評価を受けており、米国内で多くの雇用を創出しているため、ほとんど米国のブランドと見なされています。全米各地の工場で働く、こうした企業の従業員の忠誠心はほかに類を見ません。同様に日本でも、コカコーラ、マクドナルド、スターバックス、IBMといった企業は、今や日本の企業同然と考えられています。

科学分野における日米の協力は、海の底から宇宙にまで広がっています。米国は、統合国際深海掘削計画で日本と緊密に協力しています。この計画はワシントンに本部を置いています。日米両国が共同で、この計画に参加する世界の科学者たちを支援しています。この研究は、海底の堆積物を調査することによって地球の歴史と構造を解明しようとするものです。また宇宙では、米国航空宇宙局(NASA)と宇宙航空研究開発機構(JAXA)が中心となってパートナーシップを組み、国際宇宙ステーションを開発しています。また日米は、7つの地球観測計画でもパートナーシップを組んでいます。こうした共同科学研究を通じて、私たちは、特に気候変動の分野において、人類が環境変化のスピードに及ぼす影響についての理解を深め、責任ある政策措置を取ることができます。

健康科学の分野における日米の協力関係は広く深く、科学の最先端に行くものです。私たちは、新型インフルエンザに関する情報を積極的に交換し、世界保健機関などの国際機関を通じて、国内および援助を必要とする途上国でインフルエンザ対策で連携し、世界中の人々の生活を改善しています。また日米両国は、がん研究においても長期的な協力協定を結んでいます。最近では、ある日米共同研究チームが、子宮頸(けい)がんの治療に関して画期的な成果を上げました。現在、がんの臨床試験における日米協力を拡大する取り組みが進んでいます。

日米関係は深く広いものですが、世界は常に変化しており、日米関係も他の関係と同様に、進化する必要があります。その存在を当然と考えることはできません。しかし、私がシリコンバレーで学んだことのひとつは、変化は避けることができないが、それと同時にとても刺激的な経験にもなり得るということです。そして、人々や国々が協力すれば、より強固な、より豊かな未来を実現できます。

21世紀はアジア太平洋地域の世紀であると言えるかもしれません。そしてオバマ大統領が述べたように、「アジア太平洋における私たちの取り組みは、少なからず、米国と日本の永続的かつ再活性化された同盟関係に根差したものになるでしょう」

大使としての私の主な責任のひとつとして、米国と日本の同盟関係を強化するとともに、その関係が21世紀の進化する安全保障環境に対応したものとなるよう力を尽くすことがあります。今後50年間の日米同盟は、過去50年間の日米同盟にも増して重要なものとなる、と私は考えています。その同盟は、対等と国益に基づくもの、リスクと負担と責任を共有するものでなければなりません。私たちは、北朝鮮のならず者政権の脅威や中国の台頭がもたらす変化への対応も含め、地域の安全保障を維持し日本を防衛しつつ、この同盟の意味について対話を続けなければなりません。来年の日米同盟50周年は、これまでの50年を祝うだけでなく、これからの50年を定義し始める格好の機会となります。これには真剣な取り組みが必要ですし、現在迅速に対応しようとしている問題を解決する必要もあります。

地域の課題に加えて、核不拡散と核軍縮、気候変動、テロとの戦い、感染症、そして世界経済の回復といった世界的な課題にも対応すべく、日米同盟は拡張を続ける必要があります。21世紀の課題と機会は、前世紀のものとは異なり、世界的な規模を持ち、いかなる社会も単独で対処することはできないほど複雑です。成果を上げるためには、どの国家も行動と責任を分担しなければなりません。オバマ大統領が述べたように、私たちは今、世界の歴史の転換点に立っており、世界が相互につながったことで、私たちは大きな可能性だけでなく大きな危機にも直面しています。今世界が直面している数々の難題に国境はなく、私たち全体としての注意力と行動が求められています。

米国と日本には、この新しいグローバルな世界で真の指導者となるために手を携えて協力する機会が与えられています。オバマ大統領の最優先課題のうちの2つ、気候変動と核不拡散について考えてみましょう。

気候変動の分野で、米国と日本は、世界で最も革新的とは言えないまでも、少なくとも世界有数の革新的な国です。昨年、全世界の国際特許申請 16 万 3600 件のうち、50%以上が米国と日本からのものでした。また、全世界の研究開発支出の 42%以上を米国と日本が占めていました。大統領が先月述べたように、「エネルギー技術の革新によって石油消費量が減少し、経済が強化され、気候変動の原因となる危険な公害が軽減されます」。今や、エネルギー政策、経済開発、環境の持続可能性、そして国家安全保障が相互に関連していることが、これまでも増して明らかになっています。

そして、おそらく他のどの分野にも増して日米協力の効果が大きく期待されるのは、再生可能エネルギーの分野です。米国と日本は、エネルギーの生産と消費の仕方を一変させるような解決策を考え出すために協力することができます。私は、鳩山首相、小沢環境大臣をはじめとする日本の政府高官や財界の指導者と会談し、また東京、大阪、名古屋で新しい革新的なエネルギー実証プロジェクトを見学して、日本のエネルギー政策に携わる利害関係者の皆さんも同じ考えを持っていることを確信しました。駐日大使として、私は、両国政府の最高レベルにいる方々だけでなく、民間部門の指導者たちとも協力して、この分野における私たちの活動を促進していくつもりです。また、日本の新世代の起業家たちが力を発揮して、この問題への取り組みに貢献してもらえよう、力を貸すことができればと思っています。これは非常に重要な分野ですから、最も優秀な資源の活用を最優先事項のひとつとしないわけにはいきません。

オバマ大統領は今年4月、プラハで、核兵器のない世界での平和と安全保障を追求するという米国の決意を語り、世界中の、そして無数の日本人の心をとらえました。私は数カ月前に、家族と共に広島を訪れ、平和記念公園で慰霊碑に献花し、原爆の子の像に折り鶴をささげました。以来、私はどこへ行っても、日本の国民の皆さんに声をかけられ、この広島訪問についてコメントを受けています。オバマ大統領が述べたように、核のない世界という目標はすぐには実現するものではありません。おそらく私たちの生きている間には実現しないでしょう。この目標を達成するには、持久力と忍耐力が必要です。また、この課題は、気候変動と同様に全世界的な課題ですが、米国と日本は、原子爆弾を落とした唯一の国と、その被害を受けた唯一の国として、この議論で特殊な立場に立っています。

また、米国と日本は、途上国に対して、財政援助だけでなく、アイデア、技術、革新的な手法、そして専門知識など多くのものを提供することができます。米国と日本が協力して、双方にとって極めて重要な国際課題に関する知識と経験を共有すれば、日米両国がはるかに大きな影響力を持つことができると確信しています。国際衛生支援に関する共同行動計画の下で、日本と米国は、ポリビアからバングラデシュ、ナイジェリアからネパールまで、世界各地で協力して衛生プロジェクトを実施してきました。私たちは、こうした協力の歴史を基盤として、さらに日米のパートナーシップを拡大し、特にサハラ砂漠以南のアフリカにおいて、世界的な飢餓と闘い、食糧安全保障を強化するという両国の新たな約束などの重要な開発課題に対処しなければなりません。

日米関係の根本にある強さは、文化・教育・科学・ビジネスの各分野における両国の関係の強さにあります。この世に存在するすべてのものと同様に、こうした関係も大事に育むことが必要ですが、すでにいくつかの危険な兆候が見られます。例えば、米国に留学する日本人学生の数が減少傾向にあります。これは改善しなければなりません。ビジネスの分野では、米国による対日直接投資は、あるべき水準をはるかに下回っています。私たちは、日米関係を強化することのできる活動

を再活性化させるために、官民両部門で政策・制度・機会をつくっていかねばならないということを見失うわけにはいきません。

これが、日米関係の基盤になり得ると私が考えているモデルです。日米両国は、それぞれの文化的・歴史的・社会的な視点から、21世紀の国際的な課題に取り組みます。シリコンバレーでの経験から、多様性は力であること、そして複数の視点を融合することによって、問題解決の新たな道の発見を促す創造的な力が生まれることを学びました。私は、米国と日本は、多くの相違点があるにもかかわらず、素晴らしいことを成し遂げるために両者の経験と技術的ノウハウを融合させ、新たな時代のリーダーシップを担う準備ができていると信じています。

最後に再び、オバマ大統領が最近サントリー・ホールで行ったスピーチから引用させていただきます。

「そのきずながどのように培われたかについての歴史は、前世紀の半ば、太平洋における戦火が沈静してしばらくしたころにまでさかのぼります。日本の安全と安定を守る米国の決意と、日本国民の粘り強く勤勉な精神が相まって、『日本の奇跡』と呼ばれた経済成長を生み出したのは、その時でした。世界が長い間見たこともなかったような、急速で力強い経済成長の期間でした」

大統領は続けてこうも述べました。

「その後の数年間、数十年間にわたり、この奇跡はアジア地域全域に拡大し、わずか一世代で、非常に多くの人々の生活と運命が、永久により良い方向に変化しました。その進歩を支えてきたのは、懸命な努力によって勝ち取った平和であり、これを強化してきたのは、この広大な地域の国々を結び付けた相互理解という新たな橋でした」

「しかし、私たちにはまだやるべき仕事が残っています。科学技術の新たな飛躍的進歩により、太平洋の両岸に雇用を生み出し、地球温暖化を防ぐために。核兵器の拡散を止め、分断された半島に住む南の住民が恐怖から解放され、北の住民が貧困から解放されて生活できるようにするために。少女がその体ではなく精神で評価されるようにするために。そして、あらゆる国の若者たちが才能と意欲と選択によって可能な限り前進できるようにするために」

「いずれも実現は容易ではなく、後退や困難に直面することもあるでしょう。しかしこの再生の時に、この奇跡の国において、それが可能であることは、歴史が示しています。これは米国の課題です。このために、米国は日本と協力し、そしてこの地域の国々および諸国民と協力していくのです。そして、はっきり申し上げます。米国初の太平洋出身の大統領として、私は、太平洋国家である米国が、世界の中できわめて重要なこの地域において、その指導力を強化し、持続させることを約束します」

これが、オバマ大統領が数週間前に語った言葉です。私は、この両国の歴史、そして世界の歴史の非常に重要な時期に日本に着任し、ここにいる皆さん、そしてすべての日本国民の皆さんと手を携えて、大統領のビジョンの実現に貢献できることを、個人的に光栄に思います。私たちが21世紀に共に直面する課題と機会に、たとえわずかであっても貢献できるならば、これ以上に刺激的で満足できることはありません。

ありがとうございます。